



いなざわ九条の会

■2011年1月・月例会(第32回)のご案内■

映画視聴



監督 山田洋次 主演 吉永小百合
<上映 2時間12分>

日時

1月22日(土) 午後2時00分~

場所

稲沢市民会館・視聴覚室

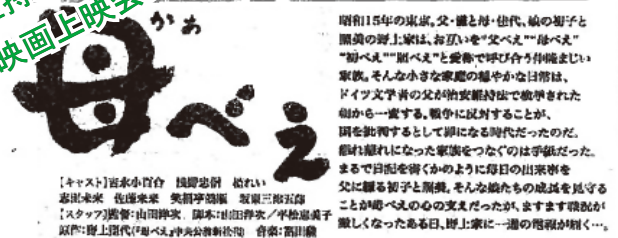
※参加費 会場費など実費割り勘(300円程度)



戦争反対…、何もいえない時代が
ほんの60数年前にあった…。



※「治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟 稲沢班」
主催の映画上映会に参加します。



●日時 1月22日(土)
午後2時開会(映画上映2時間12分)

●場所 稲沢市民会館・視聴覚室

※参加費 会場費など実費割り勘(300円程度)
主催 治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟 稲沢班
連絡先 電話0587-21-1336

■2月・月例会(第33回)の予定■

講演

「昭和史の証人に聞く・余話」を出版して
—遠島満宗さんのお話を聞く—

日時

2月20日(日)

午後2時00分~4時00分

場所

祖父江町 永張寺本堂

■2010年12月・月例会(第31回)の報告■

「戦争ボケより、平和ボケを選びたい」

そぶえ九条の会 講演とオーボエ・ピアノの夕

そぶえ九条の会の第4回例会「講演とオーボエ・ピアノの夕」が12月4日(土)午後、祖父江町体育館で開かれました。いなざわ九条の会は12月例会として協力・参加しました。講演は稲葉誠也さんが「私は専慶寺への疎開児童だった」という演題で、稲葉さんが名古屋の高蔵国民学校4年生の時(昭和19年から20年まで)、祖父江町の専慶寺に集団学童疎開したときの悲惨な生活について語られました。



昭和19、20年は戦争末期で全国の都市は米軍の空襲に見舞われていました。街の中にいることは危険なため、3年生以上の子どもたちは親元を離れ安全な田舎に移り住んだのです。学童疎開には縁故疎開と集団疎開があり、縁故疎開は田舎の親戚を頼っていくものであり、集団疎開は学年単位で田舎のお寺などに避難するもので、稲葉さんは集団疎開でした。

集団疎開での生活に楽しいことはなく、とにかく腹が減って腹が減って仕方がなかったので、どんなものでもがつがつ食べたそうです。また、年末のころ、毛糸のチョコキを調べてみると虱が並んでいました。みんな着ている物に虱がいるので、衣服を一緒にたにして熱湯に入れると、下着の色が変わってしまいました。

疎開中には面会日が月に1回ありましたが、稲葉さんは、お母さんが子どもを生んだばかりで面会に来ることができなかったので、ほんとうにさみしかったそうです。面会日に親が来れない子どもは別室に追いやられ、親が面会に来た子どもが食べ物をもらい、食べているのを見るのは耐えられなかったそうです。

勉強はほとんどしなかったと回想されました。本堂で勉強を教わることになっていましたが、先生はほとんど出てきませんでした。それで、田んぼで遊んだり、木登りをしたりして1日を過ごしました。

楽しかった事は、近所の農家へ「もらい湯」に行く時でした。お風呂は籠をかぶるようになっていてとても珍しく、又おやつをもらうことがあって、しゃぶると甘い

汁が出る砂糖の木をもらったこともありました。こういう時が疎開児童にとって息抜きのひとときだったと話されました。

集団学童疎開は、本土空襲が始まった昭和19年の後半から全国の都市の学童を対象に行われ、本土決戦にそなえて学童(次代の戦士)を疎開させたものです。集団学童疎開の児童は食事も教育も当時の通常の状態から隔離され、何よりも家庭から隔離されたことで、大切な育ち盛りの子供たちの発達が歪められました。

ところで、戦後日本は憲法により「戦争をしない国」を決意しました。そして今、この憲法9条を守ろうとして、各地で九条の会ができています。自分もそのなかで活動しているが、大事なことは、ただ、戦争の悲惨さを伝えるだけではなく、今後日本が平和憲法を守り続けるにはどうしたらよいかを考える事が大事だと思う。それは教育であると考え。教育基本法の教育の目的として、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」(改正前)とあるように、このような平和教育をおこなうことである。日本国民は「平和ボケ」になっているという人がいるが、「戦争ボケ」になり、悲惨な戦争を起こすよりも「平和ボケ」の方がいいと結ばれました。

そのあと、石田正さん(祖父江町・石田写真館の御子息)のオーボエと池谷府希子さんのピアノ共演を聞きま



また、佐藤悦子さんはオーボエとピアノといっしょに与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」と、栗原貞子の「生ましめんかな」を朗読されました。

そぶえ九条の会「昭和史の証人」展を観て

そぶえ九条の会主催の「昭和史の証人」展が12月3日から9日まで祖父江町体育館前の「かぶえぎやらしい類」で開かれました。そぶえ九条の会が「昭和史の証人に聞く」というアジア・太平洋戦争の証言集(14名)の発行にちなんで開いたものです。展示物は証言集にでてくる貴重な資料です。

広島で被爆した被爆上着や被爆瓦(平野仁さん)、ソ連収容所での抑留兵士たちの姿(ある兵士によるスケッチ)(林郁夫さん)、空母瑞鶴全容写真(岩田弓夫さん)、予科練の教育と訓練、海軍の特別攻撃隊の出撃写真(水



谷靖さん)ほか、召集令状、遺書、戦死公報など70点余の写真や資料を展示しました。

私はシベリアでの抑留生活のスケッチには胸が痛みました。極寒で粗末な食事しか与えられず過酷な労働を強

いられた日本兵の姿を描いたスケッチをみたとき、本当に戦争の悲惨さを思いました。戦争をすれば必ずこういう悲惨な事態が起きます。だからなんとしても、紛争は平和的な外交で解決しなければいけないと思いました。(愛葉行徳)